「分かる気はするけど、ずいぶんとリサイクルとかも進んできとる気がするんやけど」
「あまい！」
　弘章の返答を一蹴したかと思うと、少しヒートアップした自分を自重するかのように、笑顔に戻して言った。
「それは言い過ぎか。ゴメン、ゴメン。でもね、今まで散々海洋汚染や自然破壊をして、二酸化炭素を排出して大量に作って、売って、そのために自然や人間まで壊してきてるのに、テレビのコマーシャルとかで、『木を植えてます』とか、『環境保護に努めています』とか、『CO_2削減に努めています』とかって、都合いいって思わない？その前にすべきことがあるでしょう、って私は思うの」
「すべきこというて？」
「あとのことを考えて行動する。それが考えられないようなことはしない。責任のとれないようなことはしない。そして、もし悪いことをしたら――」
「――謝る」
「そう！それ！今まで散々木を切って、山や森を荒らして、海を汚して、環境破壊をして二酸化炭素を大量に排出してきたんだから、まず謝んないと。そこをすっ飛ばして『私たちは地球環境に良いことをしています』なんて、耳障りのいいコマーシャルで企業イメージを良くしようなんて、虫が良すぎるよ。私たち消費者を馬鹿にしてる」
「渚さんの言うことも分からんこともないけど、買って使ったのは私たちやから、私たちにやって責任はあると思うんやけど」
「うん、そう。私たちにももちろん責任はある。買った側として無責任な行動で、自然に無理な負担をかけちゃいけない。だからこれは、誰かの問題じゃなくって、私たちの、私の問題なんだと思うの。もういい加減、後にツケを回すことは止めにしないと、とんでもないことになると思う」
「とんでもないことって？」
「――人類が滅びる」
　そう言うと、弘章は少し大きめの声で、そんなー、と顔を引き攣らせて笑った。
　なおも渚は続ける。これは、人類が高い意識と自覚を持ち得るかどうかが試されている問題であって、もしそれができなければ、人類は間違いなく滅びると断言した。

もしそうなれば、滅びるのは美海であり、弘章であり、二人につながる大切な人や愛する人、あなたたちの子どもたちまでが滅びる。その姿を想像しても変われないなら、それは人の顔をした悪魔だとも言った。そう言われても、自分が良ければ、とか、今が良ければ、と言うのなら、人類は確実に滅びる。その覚悟を今しないといけない。これは大量絶滅の始まりなんだと。

急に途方もなく高い壁が自分たちの前に立ちはだかったようで、二人とも夜の海に沈んでいくようなどんよりした気分になった。来なければ良かった、とすら感じていた。

「それで、この島に来た、いうことなん？」

「うん。ネットを見てるうちに豊島のことが出てきて。事件のことなんて全然知らなくて。それで、近くだし現地に来てみようって」

お待たせ致しました、と言って、店員がピザ二枚とパスタ二皿を運んできた。思いのほか大きなピザに三人は目を見開き、合わせた。これ、どうするの？と問いかける目が、同時に弘章に向けられると、当の本人は人差し指を自分に向け、固まった。

「石川さんの話聞いて、もう本当にビックリしたよ。やっぱりネットだけじゃ駄目だね。実際に現地に来てみないと。来て、見て、感じて分かることの方が、圧倒的に大きいよ」

「ふーん、そうなん」

渚がパスタを取り分けていると、すでに弘章の口はもぐもぐと忙しなく動き、さらに両方の手にピザの切れ端が掴まれていた。

「ここは唐櫃の清水いうて、島の山からの湧き水なん」

渚の帰りの船までまだ時間があるというので、美海と弘章は渚を従えて、自転車で島の観光スポットの案内をはじめた。

「この小さな島で湧き水？」

「うん、島の真ん中に檀山いう山があって、それが標高三〇〇メートル以上あるんやけど」

「三〇〇メートル？！この小さな島で？」

「隣の小豆島やと、八〇〇メートル以上あるで」

「ひょえー」と、渚は突拍子もない声をあげてしまった。

たかだか周囲十二キロのこの島に三〇〇メートルの大きさは異様だ。そのうえ小豆島はさらに三倍近いという。スマホのマップを見ていては分からなかった瀬戸内の島々の世界に、渚は驚く。これならいかに瀬戸内の降水量が少ないといえども、水資源が枯れることもないわけだ。戦後すぐの疎開時には「四〇〇〇人もの人々が自給していた」と言っていた民宿植村の言葉も頷ける。

備えつけのコップを手に取り、切石の穴から勢いよく流れ出る水を汲む。コップの表面につく水滴が涼しげで、冷たそうだ。喉がゴクリと鳴る。流し込む。滝のように、清流が喉に滑り落ちる。こんなに水って美味しかったっけ、と渚が驚く。

「おいしいやろ」

「おいっしー！何か不思議な気分。海が見渡せるこんな小さな島で、こんなに美味しい水が飲めるなんて」

笑顔で言う渚の向こうで弘章が、まるで自分の自慢であるかのように胸を張る。

「渚さん、いくでー！うおおおおー！」

「わわわわ！うひゃー！」

三台の自転車が、坂道をまっすぐに下り落ちる。下り落ちる先は、はるか遠くの海。晴れ渡る青空の日の爽快感はこの上ない。そのまま海の彼方へ本当に放り出されていくかのようなスリリングな坂道も、この島の観光スポット。ブレーキをかけずにどこまでいけるか。そんな好奇心と恐怖心の境界を感じられるのも、ネット上にはない現実世界だ。

美術館の外に敷き詰められた芝生の庭からの眺めで、下り落ちた坂道が幾重にも並んだ見事なばかりの棚田の真ん中を貫いていたことが見て取れる。いわゆる「映えスポット」。

美術館の建物に入る前、渚は二人に言われていた。

「変な美術館やで」

コンクリートでできたドーム状の玉子のような空間に、音はなかった。

しゃべってはいけない、音をたててはいけないのだ。

しかし、音がしているような気がする。

トクン、トクン、トクン

聞こえるような気がする。まるで記憶にはない、胎内に居るような感覚。何かが飾りつけられているわけではない。ぽっかり空いた天井穴からのぞく、外界の空。
トクン、トクン、トクン
足元のコンクリートにあいたいくつもの小さな穴から、じわりと水が染み出す。染み出した水は溜まり、一筋の流れとなり、右へ左へとうねりながら低い方へと動き始める。まるで生き物のよう、と思った流れは他の流れと合流し、少し大きな生き物になる。それはまた別の流れと合流し、さらに大きな生き物となる。大きな生き物はうねうねと、一塊の大き水たまりへと流れ込んでいく。
音のないその光景を、静かに目で追う。
心が落ち着く、何も無い、不思議な空間。

島の最東端、王子が浜に辿り着く。緩やかに曲線を描く弓なりの白砂青松に、三人で座り込む。初夏を思わせる午後の日射しが静かな波に煌めき眩い。
「あの坂道ね、中学のときヒロとあっくんが馬鹿やから、どこまでブレーキかけずに曲がれるかいうてやって、本当にそのまま落ちて怪我して、馬ー鹿」
「あれはマジ死んだと思た」
観光客の中にも、不慣れな電動自転車で事故を起こし救急搬送されるケースが後を絶たないという。二人のやりとりから感じられる距離感ゼロが、見ていてすがすがしい。
「なんかいいな、二人の関係」
「そうかなー、単なる幼なじみの腐れ縁やけど」
それはどちらかというと、きょうだいや家族のような関係。思ったことがストレートに言えてしまえる関係。決して他人ではない。仮に否定的なことを言ったとしても、相手を全否定するわけではなく、そこに悪意はない。互いへのリスペクトを失うことはない。だから関係性が壊れることはない。
「――あのね、私と、何か始めてみない？」
「何か、って？」
決意を込めた渚の言葉に、美海が怪訝な表情をする。
「とにかく今を変えないといけないと思うの。新しい今を作っていかないと。自分が良ければいいとか、今が良ければいいとか、そういうのをみんなで、せーので止めら